

〔討論要旨〕

はじめに、家永報告に関する事実確認と質疑が行われた。まず水野圭士氏から、義満・義持・義教における、朝廷における地位や儀式でのふるまいとの、伝奏を使って公武の祈祷を行わせることとの関連について確認がなされ、家永氏は、各々で朝廷儀式への主体的な関わりには差異が大きく、関係に乏しい、と述べた。ついで川戸貴史氏から、昵近衆の形成と院近臣の動向の関係について質問がなされ、家永氏は、室町将軍が公家的な振る舞いをする際の側近として昵近衆が存在し、近世にとり先例・前提となる、准摂家としてではなく、政策的に取捨選択して公家側と接するようになる義持期に画期を認めるべきで、家政機関の変化がひとつの条件であろう、と述べた。ついで田中暁龍氏から、近臣集団の形成、具体的には天盃頂戴の創始もしくは儀式化の契機としての後花園院期の理解が問われ、家永氏は、課題としつつ、傍系からの継承であることとの関連を指摘した。なお後の議論の中で、天盃・天酌の相違と、天酌に対する中世・近世における否定的評価が確認された。引き続き田中報告について事実確認と質疑が行われ、浜崎耕一氏から、中近世の室町幕府・織豊政権・徳川幕府の昵近衆の継承について質問がなされた。田中氏は、先行研究では昵近衆の継承を説くものがあるが、なお課題であるとした。

続いて平井報告に関する事実確認と質疑が行われた。まず、史料の書誌・所在情報などについて事実確認がなされた。続いて村和明氏より、吉良家が担った役割と後世の高家の役職との関係、吉良と同時代に高家であった大沢家の地位について質問があり、平井氏は、囁人的な状態から役職が成立していく過程と考えることはできると述べ、吉良と同時代の大沢家で、着任の際に吉良家を見習うよう言われている事例を紹介した。続いて栗原佳氏より、公家の高家観、たとえば大名と比べた場合について質問があり、平井氏は課題であると述べた。続いて高埜利彦氏より、藤井讓治氏が示した「朝廷の伝奏」から「武家の伝奏へ」との枠組みについての理解が問われた。田中氏は、藤井氏は大坂にも伝奏が派遣されたことを重視したと思われる、家康の將軍宣下前後の伝奏山科の献身的な動きをどう考えるべきかが気になっている、と述べた。平井氏は、武家伝奏は、任命については幕府ではなく一貫して朝廷が行うと主張してきた、また職掌の面でも、徳川將軍家・豊臣家のみならず、他の大名家が朝廷に接触する際にも武家伝奏は関わるのでは、と述べた。

続いて、全体に関わる討論が行われた。まず間瀬久美子氏より、近世に武家伝奏は寺社をめぐる訴訟に関与すること、中世に寺社伝奏が訴訟に関わることを、をどう考えるかが質問された。家永氏は、中世の寺社伝奏は、訴訟を朝廷に上げることに関与する、神社の社会的地位が中世と近世では異なるという問題であろう、と

述べた。田中氏は、武家伝奏が草案を作るのは広く見られることであると述べ、平井氏は、流罪などの事例では、案を作るまでに所司代と細かいやりとりがあり、形の上では最終的には幕府が認可することは維持されるが、内容については概ね朝廷の意向を認める、というのが中期以降の動向なのではないか、と述べた。続いて高埜利彦氏より、武家の「大番」に対して「小番」という語があるとの従来の理解について質問が出され、家永氏は、武家でも、禁中の外側が大番、内側で宿泊するのが小番である、と推測している、と述べた。続いて田中暁龍氏・高埜利彦氏より、小番（欠勤）を中世では長橋局、近世では議奏・小番奉行が管轄しているようにみえることの理解について質問が出され、家永氏は、天皇家における主婦機能を長橋局がもち、これに連なる家政の中の行事として小番が勤められていると理解する、と述べた。ついで小野将氏より、近世における、小番衆の裁判への関与について質問があり、田中氏は、寛文・延宝期の難波宗量のように、表向の位置によらず関与する存在はいるが、基本的には摂関・武家伝奏・議奏が判断すると理解する、と述べた。次いで川戸貴史氏より、女房・女官の資格、公武関係における役割、武家伝奏などの役職との関連について質問がなされた。家永氏は、家柄がある程度決まっているが、伝奏の役職と連携があるかどうかは明らかでない、戦国期には近臣・女房・大名の連携が御湯殿上日記にみえる、と述べた。田中氏は、近世も資格や個別の家に対応している、

近世では將軍家に嫁ぐことがあり、これが朝幕関係を調整する裏向きのルートとして機能したのでは、と述べた。平井氏は、近世の武家伝奏の選出については、大前提として能力など人物を選ぶ。その上で、個別的なつながりも関係があるであろう、と述べた。最後に各報告者によるコメントがあり、家永氏は、小番は天皇との個人的なつながりの仲立ちになる存在であり、皇統が対立している状況下では、設置に政治的に意味があったとまとめられる、と述べた。つづく鎌倉期は、皇族・摂家將軍の周辺は武家集団とは別に公家集団が固める、室町家は、將軍の周囲に家司・家来として公家が集中している。こうした要素は近世にはなく、人間集団として分離する。武家政権として純粹で、公家にとっては新しい段階。近世のどの段階から完全に分離するか、が問題である、と述べた。田中氏は、昵近衆・武家伝奏をめぐる、近世における確立の過程はまだまだ十分つめられておらず課題である、と述べた。最後に平井氏は、天皇・公家たちが、中世以前の朝廷・京都のあり方や歴史をどれだけ正確に知っていたかが課題である、近世についても研究が進展しており、シンポジウムを組める程度には、中世の膨大な蓄積に、近世史が少しずつ近づいてきたという印象がある、今後も先行する時代についても勉強していく必要がある、と述べ、討論がしめくくられた。

（文責・村和明）